

小学校－共通歌唱教材における指導法－ 唱歌教育の歴史を基盤に

坪井 眞里子

Teaching Method on the Common Teaching Materials for Singing in Elementary School : Based on Music Education History

Mariko TSUBOI

はじめに

幼稚園、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領等の改善について、中央教育審議会答申（平成20年1月）は「生きる力」という理念の共有、知識、技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成などが学習指導要領改訂のポイントとして掲げている。¹⁾ 初等教育の音楽教育にあっても幼稚園、小学校と中学校までを想定、見越した音楽教育が必然であると考え。表現における指導でその多様性を許容するために、鑑賞を通して日本の伝統音楽、オペラ、ミュージカル、また様々な民族音楽にふれることも重要になる。子どもの発達段階や実態にふさわしい教材を選択することが必要である。しかしながら現在多様な情報が錯綜する日常において、日本らしさ、日本の美的感覚を理解でき、その美を美しいと感じる感性はいかようになっていくのか。足元を堅固にした上でこそ、幅広い理解に繋がるのではないだろうか。発音についても昨今鼻濁音が消失し、発音の曖昧さが指摘されるようになった。また国語力の低下に伴い、その歌詞の意味、背景を正しく把握できていない場面に多々遭遇する。共通教材には文部省唱歌に加えてわらべ歌、日本古謡、童謡などが取り上げられており、いずれも古くから世代を越えて歌われてきた歌である。美しいものに対する感動し畏敬の念を持てること、豊かな心情、表現力を持つことはよりよく生きることの大切な要素であると考え。また音楽と他教科との関連付けにもつながっていく。以上のような現状を踏まえ、本稿では唱歌教育についてその歴史を辿り、共通歌唱教材の意義を再確認すると共に、学生の認識についてアンケートを行いその結果について分析、指導法を考察する。拙稿は昨年の『唱歌《小学校共通教材》における日本語発音法についての試案』に続き、本校の授業において展開、検証されるものとする。

1 音楽教育、唱歌誕生の歴史

音楽教育、唱歌教育の歴史について述べていく。文部省唱歌が誕生した背景とその目的、意図した内容について検証する必要があると考える。

(1) 唱歌教育のはじまり

明治4年に文科省が設置され、翌5年8月に『学制』が制定され下等小学（6～9歳）では「唱歌」下等中学（14～16歳）の「奏楽」の科目が「当分之ヲ欠く」とされた。この唱歌教育が日本での学校教育の場における音楽教育の始まりである。しかし「当分之ヲ欠く」という但

し書きにより、「唱歌」「奏楽」とも有名無実な状態にあり、長い間その教育は行われなかった。当時庶民において、音楽は婦女子のたしなむもの、また歌舞音曲は身分のいやしいものが行うものという考え方が残っており、音楽に対する一般的な評価がされていなかった。その為、読み書きそろばんに比べて軽視された結果である。また教材が用意されていなかったため「唱歌教育」の実質的な実施を遅らせることとなった。

(2) 音楽取調掛の設置と「小学唱歌」の誕生

明治の唱歌教育に、大きな役割を果たしたのは、愛知師範学校長伊沢修二(1851-1917)である。伊沢は明治8年師範学科取り調べの為アメリカに派遣され、音楽教育家メーソン(L.W.Mason 1828-1896)のもとで音楽教育を学び、帰国後明治11年に「上申書」をもって、音楽教育の必要性を時の文部大輔(田中不二麿)に提出した。これらのことを通して明治12年10月音楽取調掛(後に上野音楽学校、現在の東京芸術大学音楽学部)が創設され、伊沢は御用掛に任命された。しかし学制制定後、全国の小学校において一校も唱歌の授業がなされなかった。その理由として、唱歌の指導にあたって教材がなかったことが、大きな原因である。そこで下記の3つの案が挙げられた。²⁾

甲案「西洋音楽が最も勝れているのでわが国に移植すべし」

乙案「わが国固有の国学から、わが国固有の音楽を培育すること。」

丙案「甲乙の中を取って、東西二洋の音楽を折衷し、わが国に適したものを制定すること

この3説の中から丙案が取り上げられ、東西の音楽を折衷して、新曲を作ることとなった。この決定こそが現在の音楽教育に繋がるものであり、のちに日本の芸術歌曲と呼ばれる日本歌曲の始まりとなった。明治13年文部省音楽取調掛編集による唱歌教材集『小学唱歌集』初編が出版され、続いて明治16年に第2編、明治17年に第3編が刊行された。この初編における緒言には教育には「徳育、智育、体育」が必要であり、特に「徳性を涵養する」ものであり「徳育」を担当する教科であると説いている。この徳育思想は昭和16年小学校令の『国民学校令』制定まで長期にわたって音楽教育思潮の根底に流れていた。

明治15年から17年に出版された「小学唱歌」では、その大部分は外国の曲に日本語の歌詞がつけられたもので『蝶々』(図1)『蛍(蛍の光)』(図2)『菊(庭の千草)』などである。これらは現在も歌われているものである。



図1 「蝶々」『小学唱歌集(初)』明治14年



図2 「蛍」『小学唱歌集(初)』明治14年

(3) 唱歌教材の変遷、言文一致

明治19年になると小学校令で教科書は、文部大臣の検定したものに限ると定められ、教科書検定制度ができた。明治20年代、30年代には伊沢修二編『小学唱歌』をはじめ多くの検定教科

書が出現し、唱歌は新しい役割を担うようになった。明治33年からでた納所弁太郎・田村虎蔵編『幼年唱歌』それに続く『少年唱歌』の中には言文一致の唱歌が出現し唱歌の革命的なものであり、この頃から広く愛唱され、滝廉太郎も『幼稚園唱歌』を言文一致で作曲している。(例としては『お正月』『鳩ぼっぼ』などがある。)

(4) 国定教科書と文部省唱歌

明治35年教科書疑獄事件³⁾が起こり、それを機に小学校では国定教科書が生まれた。文部省は明治43年『尋常小学読本』を明治44年から大正3年までに読本唱歌を吸収した学年別の『尋常小学唱歌』6冊を発行した。これは文部省が著作出版した最初の唱歌教育用の教科書であり、その中の曲は全て邦人による作詞作曲によるものであった。各学年毎に別冊になっており画期的な唱歌集として注目を集めた。この中には現在も共通歌唱教材となっている『春がきた』『もみじ』『ふるさと』『われは海の子』『冬げしき』などの名歌が含まれている。



図3 明治43年『尋常小学読本』



図4 『尋常小学唱歌』第1学年用

(5) 大正デモクラシー・文学運動と童謡運動－『赤い鳥』

明治から大正初期にかけて、自我覚醒と個人の自由を主張する「自由主義」が文学界に台頭し、小西重直によって芸術教育思潮が紹介された。それは全ての児童や青年を芸術的に陶冶しようとするもので、音楽では鑑賞教育や創作教育が主張された。それに伴い大正7年少年雑誌『赤い鳥』が鈴木三重吉によって創刊された。大正8年に『赤い鳥』童謡第1集を発行した。その序文において学校唱歌を「機械的に取り扱われてゐる或る種の低級なもの」⁴⁾と痛烈に批判し、『赤い鳥』の童謡運動こそが「子供のために真実なる創造を寄与する」ものであり、真の芸術運動であると主張した。この童謡運動に刺激され賛同した北原白秋、野口雨情、三木露風など多くの詩人や、山田耕筰、本居長世、成田為三、中山晋平など多くの作曲家が、当時の子供の心情にあうような作品を作詞作曲し、次々に雑誌上で発表した。童謡運動による新しい視点は西洋音楽の模倣と言われた学校唱歌を圧倒し、童謡は家庭の中まで浸透していった。童謡の全盛期である。『赤い鳥』の童謡運動は「言文一致唱歌」と共に浸透し、大正末期には唱歌集の中に姿を現した。(例、『靴が鳴る』、『背くらべ』、『夕やけこやけ』)

(6) 昭和一音楽教書の改訂

学校教育における唱歌教育の論議が高まり、教育者、指導者の間で「徳育教育」から「芸術教育」へ移行する気運が萌芽した。児童を開放した「自由教育」へと教育感が変化し始めた。昭和7年に改訂版『新訂尋常小学唱歌集』が発行された。(新教材、牧場の朝、スキーの歌等) また昭和5年に発行された『高等小学校』の改訂版『新訂高等小学唱歌』が昭和10年に発行さ

れた。

その後満州事変勃発、戦火は次第に広がり長期化したことにより昭和16年、小学校は国民学校と改称、教科書は国定となり時局の反映したものとなった。

昭和20年8月の終戦により連合軍の占領下において、他教科と同じく、軍国主義的なもの、超国家主義的なもの、国家神道的なものは排除され文科省は『暫定教科書』を発行した。しかし紙材の不足でゆきわたらなかつた。そのため、教師の指示のもと、不適切な歌に墨でバツテンをいれて使用した。

昭和22年には『教育基本法』『学校教育法』が公布され6・3・3・4制の小学校、中学校が発足した。また初めての『学習指導要領』のもとに『一ねんせい～六年生の音楽』(全六巻)が発行された。その方針は、修身教育の為の「徳性の涵養」や軍国主義の「皇国精神の錬成」など目的達成の手段に用いることを廃止し、音楽本来の芸術教育の立場をとることとなった。この時、明治から言われていた“教育音楽”という言い方から“音楽教育”と改められた。教科の呼び方は「音楽科」となり、歌唱、鑑賞、器楽、創作が音楽の四本柱になった。この時の教科書には、既に発表された文部省唱歌の中で詞、曲ともに傑出しているもの、わらべ歌や童謡で傑出しているもの、新作、『ぶんぶんぶん』『小ぎつね』『アマリリス』『夜汽車』『とうだいもり』『よろこびの歌』などが集められた。また文部省はこの時初めて、「文部省唱歌」と発表されていた曲の作者を明記した。昭和24年出版社編集の検定教科書に変わり現在にいたっている。

以上現在の歌唱共通教材に現代にも通じる名歌が生まれた唱歌教育の背景について、戦後学習指導要領が発行されるまでの歴史を検証してきた。これらの教材は現代の子ども達も十分理解し、その情緒を共有できるものである。言い換えれば忘れてはならない日本の四季、風土や精神の美しさに溢れている。

2 共通歌唱教材における学生の周知度⁵⁾

授業の中で学生から「この曲は始めてです。」「言葉の意味がわかりません。」という声をよく耳にする。テレビやインターネットなど情報化社会において、学生のこれまでの音楽とのかかわり、経験が多様になってきている。学校で接する何時間だけが、唱歌や共通歌唱教材を知る窓口となっており、経験値として生かされていない現状がある。そのため学生がどのくらい周知しているか把握するため、小学校、中学校の共通歌唱教材について「音楽演習Ⅱ」を履修している児童教育学専攻2年生にアンケート調査(下記参照)を行った。

(1) アンケート調査の実施

目的 音楽演習Ⅱの授業、後期「声楽」の授業に活用することを目的とする。

方法 児童教育学科児童教育学専攻2年生に次に示すアンケート調査を行う。

- ・共通歌唱教材から、知らない曲について○をうつ。好きな曲についても同様に☆をつける。(いずれも複数回答可)
- ・「なんとなく知っている」に関しても「知っている」に含まれることとする。
- ・曲についての質問がある場合は答える。(作曲者、歌いだしなどの質問)

(2) アンケート調査の結果 (履修登録数94、出席数87、回答87、回収率100%)

調査の結果は表1、表2の通りである。本稿では小学校共通歌唱教材についての結果のみ掲載することとする。

学生は1年間「音楽演習Ⅰ」の授業で幼児歌曲について学習している。現在アンケート実施

時は音楽演習Ⅱを前期履修しているが、注意書きとして、音楽演習Ⅱ履修以前のことについての質問であると明記している。中学校の共通歌唱教材についての質問はこれまでの音楽経験、周知度の参考とするため実施した。

音楽演習Ⅱアンケート

1 下記の曲は小学校歌唱共通教材です。知らない曲に○をうってください。
(音楽演習Ⅱを履修する前に知らなかった曲を含む)

『赤とんぼ』 『うさぎ』 『うみ』 『海』 『越天楽』 『おぼろ月夜』 『かたつむり』
『かくれんぼ』 『かりがわたる』 『汽車』 『こいのぼり』 『子もり歌』 『さくらさくら』
『スキーの歌』 『茶つみ』 『月』 『とんび』 『春がきた』 『春の小川』 『日のまる』
『ひらいた ひらいた』 『ふじ山』 『冬げしき』 『ふるさと』 『まきばの朝』 『むしの声』
『村のかじや』 『村まつり』 『もみじ』 『夕やけこやけ』 『雪』 『おれは海の子』

2 上記の曲で特に好きな曲に☆印をつけてください。

3 下記の曲は中学校歌唱共通教材です。知らない曲に○をうってください。

『赤とんぼ』 『朝だ元気で』 『かりぼし切り歌』 『荒城の月』 『故郷の人々(スワノー川)』
『こきりこ節』 『子もり歌(シューベルト)』 『こもり歌(ブラームス)』 『斎太郎節』
『さくら さくら』 『リント ルヂア』 『勝利をたたえる歌(ヘンデル)』 『砂山』
『早春賦』 『甕りの精』 『夏の思い出』 『花』 『花の樹』 『浜辺の歌』 『椰子の夫』
『喜びの歌』 『わかれ』

4 上記の曲で特に好きな曲に☆印をつけてください。

図5 音楽演習Ⅱ周知度に関するアンケート

① 結果と考察一曲の周知度に関して

日本のわらべ歌や日本古謡の周知度が割合高いことが挙げられる。『さくらさくら』は97%、『ひらいたひらいた』は79%が認知している。『子もり歌』は伝承歌である。これも72%と予想していたより高い数値となっている。『越天楽今様』に関しては13%と大変低い。これは平成元年からの教材となること、また平安から鎌倉時代に歌われた謡曲で、一般には普及していないものであると考える。周知度が90%を超える曲を挙げてみる。『うみ』『春がきた』『茶つみ』『もみじ』『夕やけこやけ』『ふるさと』『さくらさくら』が挙げられる。(『赤とんぼ』は誤解が生じていると判断できる。ここに書かれた『赤とんぼ』は文部省唱歌のもので三木露風作詞、山田耕筰作曲のものではないのでここでは取り上げないこととする。)

数値の50%以下の曲をあげてみると『越天楽今様』『かくれんぼ』『かりがわたる』『汽車』『月』『まきばの朝』『虫のこえ』『村のかじや』『村まつり』『雪』となる。『月』『虫のこえ』『雪』などは、幼稚園、保育園などでも歌われると推察するが、新しい幼児歌曲が歌われる機会が多くなり、季節の歌としてスタンダードな曲が歌われなくなってきたことも、起因していると考えられる。『村のかじや』『村まつり』は村という単位が希薄になっている現状、生活スタイルの変化が影響していると推測できる。

また時代別に周知度の高い曲(80%以上)をみると、明治時代『かたつむり』99%『茶つみ』91%『春がきた』99%『もみじ』97%。大正時代『こいのぼり』84%『春の小川』85%『冬げしき』85%『ふるさと』98%『夕やけこやけ』98%。昭和時代『うみ』97%。以上のように明治から教科書に掲載されて曲の方が周知している率が高いことがわかる。これは優れた

表1 共通歌唱教材の周知度に関するアンケート調査の結果

曲名	曲を知らないと回答した人数	曲を知らない	曲を知っている
赤とんぼ 『新訂尋常小学唱歌』昭和7年	9	10%	90%
うさぎ 『小学唱歌集』明治14年	25	29%	71%
うみ 『ウタノホン上』芸能科音楽 昭和16年	3	3%	97%
海 『尋常小学唱歌』大正2年	37	43%	57%
越天楽今様 日本古謡 平成13年	76	87%	13%
おぼろ月夜 『尋常小学唱歌』大正3年	28	32%	68%
かたつむり 『尋常小学唱歌集』明治44年	1	1%	99%
かくれんぼ 『ウタノホン上』芸能科音楽 昭和16年	48	55%	45%
かりがわたる 『尋常小学唱歌』明治45年	72	83%	17%
汽車 『尋常小学唱歌』明治44年	69	79%	21%
こいのぼり 『尋常小学唱歌』大正2年	14	16%	84%
子もり歌 『ウタノホン上』芸能科音楽 昭和16年	24	28%	72%
さくらさくら 日本古謡 平成元年より指定	3	3%	97%
スキーの歌 『改訂尋常小学唱歌』昭和7年	29	33%	67%
茶つみ 『尋常小学唱歌』明治45年	8	9%	91%
月 『尋常小学読本唱歌』明治43年	45	52%	48%
とんび 「大正少年唱歌」大正8年	31	36%	64%
春がきた 『尋常小学読本唱歌』明治43年	1	1%	99%
春の小川 『尋常小学唱歌』大正元年	13	15%	85%
日のまる 『尋常小学唱歌集』明治44年	61	61%	39%
ひらいたひらいた わらべうた昭和52年	18	21%	79%
ふじ山 『尋常小学読本唱歌』明治43年	27	31%	69%
冬げしき 『尋常小学唱歌』大正2年	24	15%	85%
ふるさと 『尋常小学唱歌』大正3年	2	2%	98%
まきばの朝 『尋常小学唱歌』昭和7年	50	50%	50%
虫の声 『尋常小学読本唱歌』から出典平成元年	17	57%	43%
村のかじや 『尋常小学唱歌』大正元年	83	95%	5%
村まつり 『初等科音楽』昭和17年	74	85%	15%
もみじ 『尋常小学唱歌』明治44年	3	3%	97%
夕やけこやけ「あたらしい童謡」大正12年	2	2%	98%
雪 『尋常小学唱歌』明治44年	40	46%	54%
われは海の子 『尋常小学唱歌』明治43年	37	25%	75%

(曲目は50音順)

表2 共通歌唱教材一好きな曲 アンケート調査結果

うみ (1年) S 唱歌	5名 (6%)	さくらさくら (4年) H 古謡	2名 (4%)
かたつむり (1年) M 唱歌	7名 (8%)	とんび (4年) T 童謡	2名 (2%)
日のまる (1年) M 唱歌	1名 (1%)	まきばの朝 (4年) S 唱歌	1名 (1%)
ひらいたひらいた (1年) S わらべ歌	4名 (5%)	もみじ (4年) M 唱歌	2名 (2%)
かくれんぼ (2年) S 唱歌	2名 (2%)	こいのぼり (5年) T 唱歌	3名 (3%)
春がきた (2年) M 唱歌	6名 (7%)	子もり歌 (5年) S 唱歌	1名 (1%)
むしの声 (2年) M 唱歌	2名 (2%)	スキーの歌 (5年) S 唱歌	7名 (8%)
夕やけこやけ (2年) T 童謡	8名 (9%)	冬げしき (5年) T 唱歌	4名 (5%)
うさぎ (3年) M 古謡	1名 (1%)	おぼろ月夜 (6年) T 唱歌	2名 (2%)
茶つみ (3年) M 唱歌	12名 (14%)	ふるさと (6年) T 唱歌	1名 (1%)
春の小川 (3年) T 唱歌	3名 (10%)	われは海の子 (6年) M 唱歌	6名 (7%)
ふじ山 (3年) M 唱歌	5名 (5%)		延べ87名

(M:明治 T:大正 S:昭和 曲目は学年順)

曲が残っていること、現在でも歌われる可能性の高いためと考える。

② 結果と考察—好きな曲のアンケート調査について、

今回のアンケートでは低学年の曲35名、中学年の曲28名、高学年の曲24名となり、比較的低、中学年の曲が好まれている印象を受ける。全体の中から3名以上の曲をあげると『うみ』『かたつむり』『ひらいたひらいた』『春がきた』『夕やけこやけ』『茶つみ』『春の小川』『ふじ山』『こいのぼり』『スキーの歌』『冬げしき』『われは海の子』となる。『スキーの歌』に関してはスピード感があり、雪山を滑降して降りてくるスキーの様子を歌っているが、ピアノの伴奏からみると難易度も高い為、支持率が高いのは以外な結果であった。『茶つみ』は最も人気が高く全体の14%が支持している。『夕やけこやけ』も8名(10%)の学生がこの曲を選んでいる。童謡であるが、抒情的な名曲である。

グループレッスンの授業において、元気よく躍動感のある曲を弾き歌いする事よりも、ゆっくりとした抒情的な曲を、情緒豊かに表現する方が難しいと感じている学生が、多いことに気が付く。『ふるさと』『冬げしき』『おぼろ月夜』などが挙げられる。『ふるさと』に関しては98%が周知しているが、好きな曲としては1%というのが実態である。今回のアンケートでも、ゆっくりとしたレガートの曲よりも『茶つみ』『こいのぼり』など、リズム感のある曲の方が好まれていることがわかる。歌唱やピアノ奏法でもレガートで滑らかに歌う、弾くということは、本来基本であることなのだが、実際レガート奏法、レガート唱法を不得手とする学生が多い。それがこのアンケートの結果に反映していると考えられる。

3 指導法考察

今回のアンケートの結果から、学生に支持の比較的高かった曲の中から低学年、中学年、高学年の括りの中で3曲『夕やけこやけ』(8名、低学年)『茶つみ』(12名、中学年)『スキーの歌』(7名、高学年)について曲の分析をし、指導法を考察する。

(1) 『夕やけこやけ』 中村雨高作詞 草川信作曲 八長調

中村雨高（明治30年～昭和47年）はこの詩を東京の第三日暮里小学校に勤務していた大正8年に書いた。草川信（明治36年～昭和23年）が作曲したのは、大正12年で『文化楽譜：新しい童謡その一』で発表された。この詩についての場所設定は諸説あり、中村の生家があった八王子とも言われているが、中村自身は舞台がどこであるかはっきり明言していない。旋律はというように8分音符2つの単位で単調で田園風なリズムを刻んでいく。ゆっくりとのどかな曲想で抒情的な風景を描いていく。12小節目に(譜例2)のリズムが現れることにより、曲に変化を与え全体の頂点を示すことになる。最後に日本の音階が使われ（5音音階）半音が存在しないことによって民謡的な親しみのある終わり方になっている。ピアノの伴奏においても8分音符を刻むことにより曲の流れを支えるものになる。また、この楽譜のように(譜例3)ピアノからクレシェンドして行くことにより時間的な経過や刻々暮れていく夕方の寂しさや時間を表現している。



譜例1 『夕やけこやけ』楽譜

ここで歌詞について考察する。1番2番の歌詞で変化があることに気が付く、1番の歌詞は子供たちが帰途に着く時間であり、まだ夕暮れである。その美しい夕暮れから、2番は時間の経過がある。日はとっぷりと暮れ、宵の明星が輝く。月が東の空から登り、小鳥も木々で眠りにつく。1番ではまだ子供の声が聞こえてくる、カラスの鳴き声も聞こえてきそうである。これに対して2番では、あたりは暗くなり、静かな夜の気配に包まれる。8分音符で刻まれる音は、静かに夜の時を刻む。このように1番と2番はテンポ感を変えるべきである。何故なら、感じている時の流れが違うからである。1番に比べて2番は少しゆっくり演奏するべきである。そして歌詞の主体は何であろうと考えた時、1番の主体は子供である。よって子供は歌詞を十分理解できると考える。そして「2番はと？」子ども達に問いかけたとしたら、どのような答えが返ってくるのか？歌詞から、夕暮れ時のイメージを広げていくことができる。



譜例2 『夕やけこやけ』12小節目



譜例3 『夕やけこやけ』2～3小節

日本のどこにでもある夕暮れ時の風景。これは中村が言及しなかったように、どこでも誰でも遭遇することのできる日常の1コマである。子ども達が家路につく時、みんなで気軽に、また抒情的に芸術歌曲のようにも歌える曲である。

- 教材性
- ・ 子どもの経験を生かす。夕暮れ時の美しい夕やけをイメージ
 - ・ 曲の歌詞にあった歌い方を工夫しイメージを広げる。
 - ・ 強弱をつけて表現豊かに歌う。

(2) 『茶つみ』 文部省唱歌 ト長調



譜例4 『茶つみ』

この曲は明治45年に『尋常小学唱歌』第3学年用として新作掲載された。この時は『茶摘』となっている。

「夏も近づく八十八夜、野にも山にも若葉が茂る。

「あれに見えるは茶摘じゃないか。

あかねだすきに菅の笠」

日和つづきの今日此頃を、心のどかに摘みつつ歌う。

「摘めよ摘め摘めつまねばならぬ。

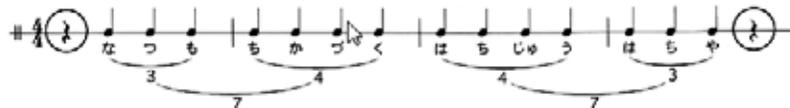
摘まにゃ日本の茶にならぬ。」⁶⁾

言葉のリズムからみると七七調になっており、最後のみが七五調になっている。日本人にとってリズムにのり易い流れになっている。旋律は第4音と第7音を持たない「ヨナ抜き音階」で曲の構成はA・B/A・Cで二部形式。手遊び歌としても知られている。なぜ一拍目が（譜例5）休符になっているのか。音節で考えると（3/4）（4/3）となっている。始めと終わりに休符が入ることで、丁度4拍子で辻褄があうことになる（譜例6）2つのフレーズの反復によって曲は進む（4回繰り返す）。

この歌詞は京都宇治田原の民謡「茶摘み歌」の一節



譜例5



譜例6

" 向こうに見えるは茶摘みじゃないか あかねだすきに菅の笠 "

" お茶を摘め摘め摘まねばならぬ 摘まにゃ田原の茶にならぬ "

をもとに作られたと言われている。先に全体の歌詞を載せたが、これは明治45年に教科書に掲載されたもので、これには1節2節ともに「」で囲まれて、「あれに見えるは～」「摘めよ～」会話になっており、明らかに意識して話すように、呼びかけるように歌うべきであろう。音域は主音から主音の1オクターブの中で動き、1～4小節は上行形、5～8小節は下行形、9～12小節は上行形、13～16小節は下行形で主音に落ち着くといった形態になっている。以上のようにこの曲は言葉のリズムと、旋律が自然な流れにそって作られている。

教材性 ・ 手遊びをしながら、リズムを感じて歌う。

・ 歌詞から情景をイメージする。季節感、歌詞の言葉を理解する。

・ 曲想にふさわしい表現の工夫をする。旋律の流れを理解し、明るい自然な声で歌う。

(3) 『スキーの歌』 文部省唱歌 林柳波作詞 橋本国彦作曲 ト長調

昭和7年『新訂尋常小学唱歌（六）』に掲載された。その後一時教科書から姿を消したが昭和52年の学習指導要領改訂で共通歌唱教材に指定された。曲はAA'BA"の二部形式に16小節目

譜例7 『スキーの歌』

からコーダ（終結部）が入る構成になる。広々としたゲレンデで風をきって駆け巡るスキーの醍醐味を歌詞、旋律ともによく表現している。作曲の橋本国彦（明治37～昭和24年）は東京音楽学校器楽科を卒業したヴァイオリニストで、曲の中にも器楽的な音の使い方がみられる。（譜例7の□）スピード感のある上行形である。躍動的な跳躍音程も使われ、カーブを切る様に下行形で主音に向かう。この音形が（□で囲まれた部分）曲の中に3回現れる。歌い方もおのずと、滑らかにしかもスピード感を感じながら歌うことが大切である。コーダの部分はテヌートの指示

があり、始まりは弱拍であるがしっかり歌うべきである。ピアノ伴奏に関しても、リズムカルで軽快な音型となっている。その理由をしっかりと理解することである。また3段目だけは少し雰囲気を変えて滑らかに豊かに表現できる。その工夫について子どもの意見を求めることもできる。全体的に伴奏にスタッカートがついていることにも注意したい。曲のコーダは二部になっており、下のパートが主旋律になる。和音は完全4度、長3度、短3度、短3度、完全4度、短3度、長3度と動く。学生にはこの和音の音色の変化を認識する必要がある。

文語表現に関しては、確認をする必要がある。

日の影 = 日の光 はゆる野山 = 照り輝く野山 一白影なき = 真っ白で一瞬の影もない 飛鳥の心地 = 飛んでいる鳥のような心持ち

歌詞の主体は歌っているスキーをする人自身である。白銀の中を駆け抜けていくスピードと憧れに満ちた心持ちを、曲想を工夫することで体験することができる。

- 教材性
- ・ 歌詞や経験から情景をイメージして歌う。
 - ・ リズムや旋律を生かした表現を工夫する。
(フレーズの変化に気づいて歌い方を工夫する)

4 考察

現在の日本の音楽を考えた時、共通歌唱教材の中には2つの種類の日本の音楽がある。一つはわらべ歌、日本古謡、民謡など日本の音階や作曲技法による古来の伝統的な音楽。もう一つは西洋の様式を取り入れ、日本人によって新しく作曲された楽曲（日本の洋楽）。前述の歴史からもわかる様に、日本の唱歌は明治以降に輸入された欧米の音楽の影響により、生まれたものである。滝廉太郎や山田耕筰の芸術的に価値の高い作品、その他の童謡も新しく作曲された日本の洋楽にあたると思われる。

学生に人気のあった『夕やけこやけ』は童謡であり、大正期に生まれた日本の洋楽と認識す

るが、旋律は日本の音階（五音音階、ヨナ抜き音階）で作られている。『茶摘み』も同じく明治に作曲された文部省唱歌であるが日本の音階で作曲されている。日本人には親しみやすい作りになっていることがわかる。構造的な親しみ易さと曲の情感、また仕事歌にも近いリズムの良さが、自然と馴染むのであると考える。西洋的な音楽様式と日本の音楽や言葉がみごとに融和している。『ひらいたひらいた』『さくらさくら』などのわらべ歌や日本古謡も、日本古来のものとして、十分学生に理解しうる感覚として受け入れられている。そういった意味では昭和7年に『スキーの歌』が尋常小学唱歌として発表された当時、斬新なイメージで子ども達に大変人気であったという⁷⁾。それは西洋的なリズム感や跳躍音程、曲の構造によるものであろう。これは現在の学生にとってもやはり新鮮なイメージで受け入れられている。『ふるさと』『もみじ』『冬げしき』『おぼろ月夜』これらも抒情的な日本の風土を十分感じさせるもので、流れるようなレガートを美しいと感じとり、普遍的な日本の四季や風景をイメージする一つのきっかけとなっている。

今回の学生のアンケート結果と授業での取り組みから、自ずと日本的な旋律の美しさを許容する受け皿を十分持ちあわせ、理解していることがわかる。しかしそれは、漠然としており、曲の内容についての分析や、その曲をどう展開していくのか、理解や知識が十分及んでいない答えであることも読み取れる。自然に日本の音階に親しみを感じることに、またリズムを心地よく感じることに、そういった内在する感覚を認識し、引き出すことの重要性。また歴史的な背景、詩の読み取り、曲想、楽曲の分析など多面的に認識し、それらを総合的に加味した上で、授業を進めることの必然性を再認識した。

おわりに

個々の学生の音楽経験について、無論ある程度開きがある。ピアノレッスンや合唱部、吹奏楽など、小学校、中学校、高校と何らかの形で積極的な意図による音楽経験を積んだ学生ほど、共通歌唱教材に関しても深い認識を持っている。また音楽的能力も比較的高い。本校の音楽演習Ⅱにおけるクラス授業で後期に声楽を行うが、その授業内でできるだけ共通歌唱教材、または音楽の教科書に添った教材と出会うということが求められる。

文部省唱歌は、発表当初、東西二様の音楽の折衷として生まれた新しい分野であった。しかし現在、多様な音楽環境にある現状の中で、文部省唱歌は日本的な風土、情緒、生活などを、歴史的流れを通して、現在に伝えるものとして有効なものである。『ふるさと』『もみじ』『おぼろ月夜』などを歌う時、イメージするのは、それぞれの経験、または想像の中にある故郷のイメージ、日本の原風景である。現在の学生は、例えば「ふるさと」という概念で理解する。その風景は具体的にあるわけではなく、漠然としたイメージである。授業では、そういった概念的な「ふるさと」を具象化し、言葉、音という形で具体化していく。文部省唱歌を歌う時、そのような過程を踏むことも必要となる。言葉でイメージ、情景、心情を伝えること、またそれを音楽的能力により表現していくことである。その為には、豊かな感性、国語力、音楽的な表現力が必要となる。学習者はその過程で、日本的なものを再認識することができる。これらは指導者が、指導要領でも示唆されている「音楽を愛好する心情と、音楽に対する感性を育てる」⁸⁾を実践する為の大切な要素となる。これらを踏まえ、児童教育学を学ぶ学生は、教材の理解を深めると共に、豊かな情操を養うということを再認識する必要がある。今後授業におい

て、きめ細やかな楽曲の分析と共に、実践につなげていきたい。

注

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 1項 (平成20年)
文部科学省 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 1項 (平成20年)
- 2) 古田庄平 『わが国における音楽科教育の歴史の変遷』 長崎大学教育学部人文科学研究 55 (1975) 最終アクセス at: 2016-09-13T14:34:36Z
http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/31601/1/kyoikuKyK00_24_14.pdf#search=%E5%94%B1%E6%AD%8C%E6%95%99%E8%82%B2+%E5%8F%A4%E7%94%B0
- 3) 明治35年学校の教科書採用をめぐる教科書会社と教科書採用担当者との贈収賄事件。
- 4) 古田庄平 『わが国における音楽科教育の歴史の変遷』 長崎大学教育学部人文科学研究 58 (1975)
- 5) 本稿では人口に膾炙していることを周知度と示すこととする。
- 6) 堀内敬三、井上武士 『日本唱歌集』 岩波文庫178 (1991)
- 7) 長田暁二 『日本唱歌名曲集』 全音楽譜出版社182 (2013)
- 8) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 7 (平成20年)

図

- 1) 堀内敬三、井上武士 『日本唱歌集』 岩波文庫143 (1991)
- 2) 前掲書187
- 3) 前掲書16
- 4) 前掲書18
- 5) 音楽演習Ⅱ 共通教材周知度に関するアンケート
- 6) 初等科音楽教育研究会 『初等科音楽教育法 [改訂版]』 音楽之友社157 (2013)
- 7) 前掲書163

譜例

- 1、2、3 初等科音楽研究会 『初等科音楽教育法 [改訂版]』 音楽之友社158 (2013)
- 4、5 前掲書163
- 6 富澤裕 『歌唱共通教材 指導のヒント』 音楽之友社30 (2013)
- 7 初等科音楽研究会 『初等科音楽教育法 [改訂版]』 音楽之友社185 (2013)

参考文献

- 堀内敬三、井上武士 『日本唱歌集』 岩波文庫 (1991)
長田暁二 『日本唱歌名曲集』 全音楽譜出版社 (2013)
初等科音楽教育研究会 『初等科音楽教育法 [改訂版]』 音楽之友社 (2012)
中等科音楽教育研究会 『中等科音楽教育法 [改訂版]』 音楽之友社 (2015)
文部科学省 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 (平成20年)
古田庄平 『わが国における音楽科教育の歴史の変遷』 長崎大学教育学部人文科学研究 (1995)
富澤裕 『歌唱共通教材 指導のヒント』 音楽之友社 (2013)
奥中康人 『国家と音楽 伊沢修二がめざした日本近代』 春秋社 (2008)